私たちが今、知らなくてはいけないこと。

京都で行なわれた「AIDSを生きるひとたち」の写真展。

取材・文／木村紀子　写真／内藤貞保

4月の末、京都YWCA（上京区室町出水上ル）にて、ある写真展が行なわれた。壁に展示されているのは、我が子や友人、恋人と共に、爽やかな微笑みを浮かべたひと達の写真の数々である。たまたま会場を訪れたひとならば、楽しげで、何の陰りも感じられないこれらの写真に添えられた短いコメントの内容にドキリとするかもしれない。例えば、サンフランシスコの街を背景にして、くったくのない笑顔を見せる青年の写真の下にはこう書かれている。「酔ったいきおいの初めてのセックスで、僕はHIVに感染した――」。「フォト・ドキュメント～AIDSを生きる」と題されたこの写真展は、HIV／AIDSを持つひとびとが、自らの意志で自分の名前と顔を公表したものである。きっかけとなったのは、2年ほど前から京都で活動を行なっている「京都YWCA若者・女性とHIV／AIDSプロジェクト」のスタッフが出会った、一冊の写真集だった。写真展のタイトルともなった題名のその本は、カメラマン土橋正之氏が出会ったHIV／AIDSを持つひとびとを撮影したもので、肌の色、年令、職業、文化、宗教の異なる27名（その約半数がAIDSを発病している）の姿が写されている。4歳のときに受けた輸血で感染した少年、妊娠中に夫がAIDSであると知らされた女性、「愛したひとが、たまたまHIV感染者だっただけ」と、相手の感染を知っても心変わることなく、より絆を強めて寄り添う恋人たち。彼らの明るい笑顔と、その裏にあるとてつもない勇気と前向きな生き方に共鳴したというプロジェクト代表の黒木順子さんほかスタッフは、この事実をより大勢のひとに知らせたいと写真展を企画。土橋氏撮影の写真を数点、YWCAで展示することの同意を得たのである。その結果、写真展は新聞にも取り上げられ、大きな反響を呼んだ。「HIV／AIDSには、知識不足もさることながら、まだまだ差別や偏見が消えることはない。でも彼らを見て下さい。AIDSは決して特別な病気ではなく、それを持つ人々も決して特殊な人間ではありません。このことを私達は知らなすぎるのではないでしょうか」と黒木さんは語る。写真展は幕を閉じたが、「京都YWCA若者・女性とHIV／AIDSプロジェクト」では、AIDSに関する勉強会や講演などを定期的に行なっている。また、女性を対象としたHIV／AIDS電話相談も受け付けている。問い合わせ・連絡先は左記まで。

●京都YWCA若者・女性とHIV／AIDSプロジェクト
京都市上京区室町出水上ル
★075・411・1348
★075・431・0352
担当：榎本てる子
月・木（1：00PM～9：00PM）
日・祝休

●AIDS TELEPHONE HOTLINE
★075・414・3747
毎週月曜日（日祝休）
1：00PM～9：00PM

「フォトドキュメント～エイズを生きる」／土橋正之
岩波書店／定価1,400円
発売中

FAME Report

京都ノゾキ見トピックス

マンガと地球の奇妙な関係。

恐怖心と好奇心を刺激する一枚の絵。それがマンガ。そのマンガが地球の未来を予言し始めた。

取材・文／道畑希早子　撮影／土本美樹

●ディスカッション風景
真剣に教授の指導を受ける学生たち。
ここではお互いがライバルだ。

●「1996京都国際マンガ展」カタログ
国境や言語・習慣を越えた平和へのメッセージに、
18,000人もの人が集まった前回の国際マンガ展。

「マンガ？・好きっスねえ。毎週買って読んじゃう。」って、そりゃあ、コミックマンガの類でしょ。私が言ってるのは、たった一コマだけの世界に、スパイシーな皮肉と、人間臭くしかも愛すべきユーモアがいっぱいの「マンガ」のこと。

「実際、日本におけるマンガの認知度は低い。しかし、これほど親しみやすくしかも世論の代弁者として、多くの人に対してメッセージを投げかけられる芸術は他にないのです。」と語るのは京都精華大学美術部マンガ専攻教授であるヨシトミヤスオ氏。京都国際ユーモリスト協会の代表も務めるヨシトミ氏は、日本有数のマンガ家であり、1991年2月には「1991京都国際マンガ展」を主催。世界43ヶ国から選出されたよりすぐりの300点は、日本中にセンセーションを巻き起こし、多くの媒体が取り上げた。企画が固まったのはこの会場だった。

「我が社の企業テーマとヨシトミ先生のお考えはピッタリ一致しています。これは広告界における我国初の産学協同プロジェクトであると自負しています。」と、堀場製作所広報室室長の河内英司氏はにこやかに語る。

そのテーマとはズバリ「地球環境問題」である。堀場製作所と言えば「分析計のホリバ」として、各国で評価され、分析計の開発のみならず、環境問題に対する啓蒙活動を様々なメディアを通して社会に発信し続けている、分析技術のエキスパート企業である。同じく、今年設立22年目を迎えた精華大学マンガ専攻の授業においても「地球環境問題」を重要なテーマとしてとらえていた。こうして両者は出会い、学生の作品を通して社会にメッセージを送ることになったのである。

毎月1回、学生たちの様々なアイデアと手法で描かれた作品が、教室の机に並べられる。学生達の明るい笑い声と、教授の厳しい評価の中、その月に掲載される作品が選ばれる。掲載期間は1年間。「EARTH GALLERY」としてカラー掲載されているのがそれである。

また、来年2月に再び開催される「1996京都国際マンガ展」においても、地球環境問題がメインテーマになることが決定している。時代の転機にはいつも民衆と一緒に立ち上がるマンガ家の姿があった。そして今も、世界はマンガが持つ説得力の強さを望んでいるといえよう。

※「1996京都国際マンガ展」
1996年2月15日(木)～20日(火)
高島屋7階　グランドホール　有料